

ドミノ肝移植セカンドレシピエントに対する移植に対する意識調査

The examination of the feeling in the second recipients
experienced the Domino liver transplantations

西5階病棟

北澤郁恵 草深仁子

信州大学医学部保健学科

鈴木泰子

要旨

最近、ドミノ肝移植セカンドレシピエントに術後起こると予測されるアミロイド沈着が当初考えられていた時期より早く起こる事が明らかになった。セカンドレシピエントが移植とFAP発症をどのように捉えているかを明らかにするために面接を行なった。ドミノ移植を受けた事は原疾患から逃れ命を長らえるための手段として捉えられており、アミロイドが沈着した現在もドミノ移植への肯定感は変わらなかった。一方で手足のしびれ等が見られるとFAP発症や病状の進行と結びつけ不安を感じており、継続的な心理的サポート希求があることが考えられた。

キーワード

ドミノ肝移植 セカンドレシピエント インタビュー

I. 研究目的および背景

我が国で肝硬変の末期で苦しむ患者の最終治療手段としての肝移植が始まってからすでに15年が経過している。家族性アミロイドポリニューロパシー（以下FAP）患者に対する肝移植は、2006年までに世界で1200例以上実施され、そのうちの532例にドミノ肝移植（以下ドミノ移植）が実施された。（図1）

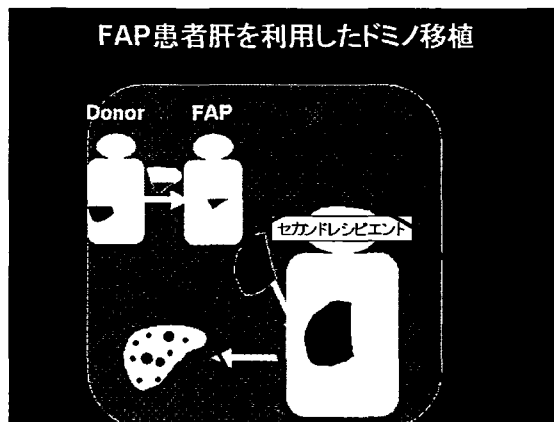


図1 FAP患者肝を利用したドミノ肝移植

日本では28例が実施され、当大学では一定の適応基準を設けて7例のドミノ移植を実施した。

(表1) (表2)

表1 セカンドレシピエント適応基準

セカンドレシピエントの適応基準	
(信州大学2000年~2003年)	
1.	肝癌で40歳以上の患者
2.	劇症肝炎か同等の緊急性のある患者
3.	その他の条件は信州大学生体部分肝移植に準ずる

表2

Reporting centers and number of transplants performed (Nov.30, 2006)

Domino LT

Portugal	221	京都大学	8
France	82	熊本大学	8
Sweden	38	信州大学	7
Germany	35	新潟大学	2
Brazil	33	北海道大学	1
USA	30	九州大学	1
Japan	28	東京大学	1
Spain	27		28
UK	12		
Bergium	8		
Canada	7		
Switzerland	4		
Netherlands	3		
Italy	2		
Argentina	1		
Australia	1		

532

Familial Amyloidotic Polyneuropathy World Transplant Register

ドミノ移植開始当初、セカンドレシピエントのアミロイド沈着は移植後20年位で始まるのではないかと予測されていたが、最近移植後5~6年でも沈着がみられることが明らかになり、より早い時期のFAP発症が危惧されるようになった。

そこで今回、ドミノ移植後5~6年経過したセカンドレシピエントに対して、自ら受けたドミノ移植とその後のFAP発症をどう捉えているかを明らかにすることは、今後ドミノ移植医療におけるきめ細かな支援につながると考えた。

II. 研究対象および方法

1. 研究対象

2000年から2003年に当大学にてドミノ移植を受けたセカンドレシピエント7名の内、承諾を得た4名。

2. データ収集および分析方法

データ収集はインタビューによって、ドミノ移植を受けると決定した時の気持ち、FAP発症に対する気持ち、今後ドミノ移植を受けたいと希望される患者に自身の経験を通して伝えたい事との内容について、2006年10月から12月に半構成的に行なった。その上で収集した内容を質的に分析した。

3. 倫理的配慮

事前に院内看護研究倫理委員会の承諾を得た上で、インタビューの際、セカンドレシピエントに研究への参加は自由意思によるものと説明し、承諾の得られた人を対象とした。

III. 結果

1. 対象の概要

肝細胞癌を併発したC型肝炎肝硬変患者1名、肝細胞癌を併発したB型肝炎肝硬変患者2名、成人型シトルリン血症患者1名。4名のうち2名は胃壁にアミロイド沈着を認めている。

(表3)

表3

対象の背景			
性	年齢	原疾患	アミロイド沈着(時期)
M	45	LC (HCV), HCC	
M	61	LC (HBV), HCC	+(術後3年目)
F	52	LC (HBV), HCC	+(術後4年目)
M	32	CTLN2	

LC: 肝硬変 HCC: 肝細胞癌 HBV: B型肝炎 HCV: C型肝炎
CTLN2: 成人型シトルリン血症

2 結果

分析を通して、自ら受けたドミノ移植とその後のFAP発症について、対象は以下のように捉えていることが明らかになった。

生きたいという人間の基本的欲求が満たすための絶対必要条件として、ドミノ移植を受けなければならないほど追いつめられた状況の中で意思決定が行なわれている。

何もしないで死を待つことに対しては恐怖を感じて、命の保障を獲得したいと思いドミノ移植を決意する。決意にあたって自分が生きることへの正当性の主張が必要であり、医療者からも決意についての承認や後押しを求めている。また移植し命をもらって薬剤などの恩恵も受けたいと考える。

ドミノ移植は戦ってきた病気から解放されて且つ生きるために必要なものであり、ドミノ移植を受けることはFAPを自分に取り込むことでもある。移植後FAPは自分の中に漠然とそして必然と存在するものとなる。どんなに希望した移植であっても、直後の痛みの苦痛は耐え難いものと鮮明に記憶されている。

こうしたプロセスを通して、自分に肝臓を提供してくれたドナーへは、切れそうな命を繋げてくれたことに対する揺るぎない感謝を感じ続けている。また周囲の医療者から移植を受けた事に対する承認を受け続けることが心理的満足につながっている。ドミノ移植に否定的な報道に反発を感じ、生きたいという気持と生きるための手段としてのドミノ移植を、社会にも常に認めてほしいと考えている。

IV. 考察

術前に行われるドミノ移植の説明の中でFAPについて説明するが、FAPを取り込むことになるという重要な事実であるにも関わらず、生きるために受けたいという意思が、重要な事実を意識下においやってしまう。生命の安全が確保できた術後に、一般的な移植についての退院指導に加え、再度FAPについての説明を加える必要がある。

ドミノ移植を行った結果として新たな病気であるFAPを取り込んだことについて、充実したサポートが必要。神経症状について、手足のしびれをFAP発症と結び付けて心配しているが、心理的な部分だけでなく慢性的全身疾患であるFAPについて、神経内科・眼科・腎臓内科・泌尿器科との連携したフォローアップや、必要なときにアクセスできる継続的な心理的サポート体制等、トータルサポートの体制を充実していく必要がある。

V. 結語

1. 何もしないで死を待つことに対しては恐怖を感じて、命の保障を獲得したいと思いドミノ移植を決意している。

2. ドミノ移植を受けることはFAPを自分に取り込むことでもある。移植後FAPは自分の中に漠然とそして必然と存在するものとなる。
3. FAPのドナーへは、自分の切れそうな命を繋げてくれたことに対する揺るぎない感謝を感じ続けている。
4. 周囲の医療者から移植を選択することの承認を受けることが、心理的満足につながっており、必要なときにアクセスできる継続的な心理的サポートを含めたトータルサポートを充実させていく必要性が示唆された。